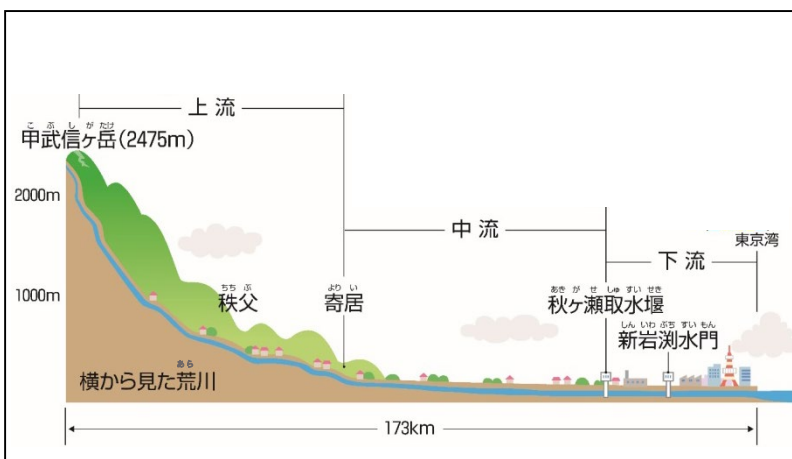


扇状地

～山岳地帯を抜けるとそこは扇状地～

扇状地端は破堤しやすく、熊谷堤は、治水の要衝とされてきました。



横から見た荒川



扇状地図

荒川流域と扇状地

扇状地は、河川が山地から平野にでたところにできた扇形の地形です。山地からの出口が扇の要で、ここを「扇頂」といいます。川は山地から平野に流れ出ると川幅が広がり、山から運んできた大きな石を堆積させるようになります。また川の位置を左右に自由に変えることができるようになるため、大きな洪水がおこると、高くなった河床を避けて低い方へ河道が移動します。そのために扇状の地形ができるのです。

荒川の場合寄居町を扇頂、熊谷地先を扇端にして広大な荒川扇状地が形成されています。

荒川扇状地の特徴

寄居町を扇頂に高大な「荒川扇状地」が形成されています。しかし、これらの扇状地が形成されていたのは旧石器時代。実は縄文時代以降、扇状地の扇頂は、寄居より少し下流の旧川本町明戸付近（現深谷市）へ移動したと考えられています。

この扇状地は半径10kmにわたって広がり、「荒川新扇状地」、「新荒川扇状地」、「熊谷扇状地」となどと呼ばれています。

扇状地の傾斜は案外に緩く、現地では傾斜していることさえ実感できない場合が多いのですが、なかでも、「荒川新扇状地」は平均勾配2.9/1000と、とても緩やかなことが特徴です。つまり上流側へ1km進んでもたった3m程度しか高くなりません。



扇頂付近の荒川（寄居町）

破堤箇所が多い扇状地

荒川は山岳地帯を抜けると川の勾配や水勢も弱まり、特に、寄居町から熊谷地先で急にその流れが緩やかになります。この熊谷地先が荒川扇状地の末端であるために、吹上地区をはじめ下流の東部低地では古来よりその乱流に見舞われ、水害に悩まされてきました。

このため、江戸幕府は1629（寛永6）年に河川改修の実績のある関東郡代伊奈忠治を命じて、荒川の流路を変えることとし、熊谷市久下地先で土手を築き締め切りました。

荒川的主要な破堤箇所は、扇状地端で河床勾配が急激に弱まり、また、河川改修（西遷）による曲流点でもある熊谷市から鴻巣市付近に集中しています。

〔主要破堤箇所〕

- 万吉堤（熊谷市、荒川右岸）
1910（明治43）年の洪水で決壊。修萬吉堤碑が建つ
- 熊谷堤（熊谷市、荒川左岸）
1623（元和9）年、1910（明治43）年等度々決壊する
- 吉見堤（熊谷市大里町 荒川右岸）
1910（明治43）年の洪水で決壊。吉見堤碑が建つ
- 久下堤（熊谷市、荒川左岸）
カスリーン台風で決壊。決壊の碑が建つ
- 上砂堤（吉見町、荒川右岸）
1913（大正2）年の洪水で決壊。修堤記念碑が建つ
- 大間堤（鴻巣市、荒川左岸）
カスリーン台風で決壊。災害復旧記念碑が建つ
- 都幾川左岸堤防（川島町長楽）
1913（大正2）年の洪水で決壊。修堤記念碑が建つ

治水の要衝に築堤された桜の堤

熊谷市街地周辺は、洪積扇状地に対して大麻生付近を扇頂とする荒川扇状地が発達していました。荒川は広い川原の中の網の目状に乱流する典型的な扇状地河川の様子を見せています。このため、古くから築堤などの努力が積み重ねられていました。特に左岸の熊谷堤は、治水の要衝であったことや堤沿いの桜によって知られています。

アクセス

熊谷桜堤

交通：JR上越新幹線・JR高崎線・秩父鉄道秩父本線

「熊谷駅」下車、徒歩5分

住所：熊谷市河原町2丁目地先

